

人類にとって

「火」とは

「火」は地球上に暮らすわたしたち人類にとって欠かせない大切なものです。だれでも知っているように、文明は「火」を利用することによって発展してきました。

「火」は主に四つの力を持っています。一つは、「火」が持つ熱によって、「物」を変化、変質、変容させる「火」が持つ「熱」によって、「暖」をとることができるとであり、二つ目は、「火」によって、「明るさ」を得られること。そして四つ目は、「火」が人にもたらす「内的な力」です。

人は、「熱」を利用して、「物」を変化、変質、変容させ、道具をはじめ、生きるために必要なさまざまな「物」を作り出してきました。また、「物」を変化、変質、変容させる技術が発達するに従って、人はより便利

教育における「火」の役割と力

大村 祐子

Written by
Yuko Omura

な「物」を作り、それによって多くの労力を軽減することができました。今それらを利用できる人々は快適な暮らしを楽しんでいます。また、「火」はエネルギーにもなり、人はそのエネルギーが持つ力によってさまざまな恩恵を受けています。さらに人は鉱物、植物、動物に「熱」を加えて調理することを覚え、それによって、鉱物、植物、動物は変化、変質、変容し、今人類は、地球上にある多くの「物」を食べることができのです。

三つ目の「明るさ」は、自然のリズムに従わずに人が生きることが可能になりました。かつて人は太陽が昇るとあたりが明るくなり、目覚め、活動し、太陽が沈むとあたりは暗くなり、休み、眠る…というリズムに従って生きていました。けれど人は、「火」が持つ要素の一つである、「明るさ」を利用することを知り、太陽が沈んだ後も活動することができるようになったのです。

また、人は、「明るさ」を利用することによって、太陽の光が届かない地下や深い谷や森で暮らすこともできるようになりました。

「火」が持つ四つ目の「内的な力」人は、「火」を見るとき、「火」に囲まれるとき、「火」にあたる時、さまざまなことを考え、感じます。「火」の中に自然の摂理や法則、真理を見、考えます。人は、「火」に囲まれるとき、勇気を、慰めを、優しさを、愛を、慈しみを、そしてときには怒りを、悲しみを、憤りを、畏れを感じます。こうして考えたこと、感じたことは、人の内に衝動を、

欲求を、願望を生み出し、行為することを促します。また、それが必要とされるときには、衝動や欲求や願望を抑えようと努力します。このように「火」はわたしたちにさ

「火」とともにくらす

さまざまな「内的な力」を与え、わたしたちはそれによって「精神の進化」を遂げることができるのです。

「火」を学ぶ

さて、教育における「火」の学習は、「火」が持つこの四つの効用を社会的、自然科学的、人文学的、芸術的な分野におけるさまざまな学料をおして行われます。ここではそれぞれの学習の内容について書くことはできませんが、「火」を学ぶとき、わたしがもっとも大切だと考えていることをお伝えしたいと思います。それは「火」そのものの持つ力についてだけではなく、「火」が持つ力と同じ力を、わたしたち人間も持っているのだということを学び、理解し、それを子どもたち自身が自分の「内」に体験することです。わたしはこんなふうに考えています。

人の身体の中には「血液」が流れています。「血液」は、生命を保つために必要なすべてのものを身体の隅々にまで運びます。そして「血液」は熱を持っています。その熱は「火」が持つ熱と同じように、

「物事」と周囲の「人」を変化させ、変質させ、変容させます。

「火」が持つ力と同じ人の内にある力、すなわち「熱」はどのように物事を変化、変質、変容させるのでしょうか？たとえは…わたしたちが「熱意を持つ」と、難しいと感じられたことをも成し遂げることが出来ます。わたしが確信を持っていることを人に「熱心に勧める」と、それを受け入れてもらえることがあります。反対に、ある人に「熱中する」あまり、その人に迷惑をかけ、その人を遠ざけてしまうことがあります。「熱血漢」がいるだけでその場の雰囲気は熱くなり、そこに居合わせた人々の気分が高揚します。このように、わたしたち自身も「熱」を持っており、その「熱」は物事を、「気」を、また人をも変化、変質、変容させる力があるのです。

また、人が内に持っている「熱」は物事や人や人を温め、あるいは冷やすことも出来ます。人がわたしに温かい態度で向き合ってくれるとき、わたしの心はぬくもりです。また、わたしと相手の心が温かいとき、わたしたちは互いに理解し、譲歩し、思いやることができます。人が温かい心を持ち寄って集まる

と、雰囲気や和み、物事がスムーズに運びます。

こうして、温かい心は人とより良い関係を築くことを助けます。反対に、冷たい心は人の心を冷やし、硬くし、固めてしまいます。冷やされ、硬くされ、固まってしまう心は、人の態度を頑なにし、また

人と人との距離を離してしまうことがあります。

次に「火」の効用の一つである「明かり」について考えてみましょう。人はだれでも「内」に「火」が持つ「明かり」を持っています。誇るとき、歎ぶとき、信じるとき、人は自らの「内」に「明かり」を感じます。



冬の風景(ひびきの村)



北海道の自然の中で戯れる子供たち(ひびきの村)

「明かり」は人に希望と勇気をもたらします。そして、また「明るい」ところでは虚偽が暴かれ、不正が、背信が明るみにされます。絶望と、虚偽と、背信と、不正、墮落、不善は、人がその内に持つ「暗がり」の中に生まれ跳梁します。ですから人は、自らの「明るさ」の中で、真実のみを語り、真実のみを行い、真実のみを生きようと努めるのです。

「火」が持つ「内的な力」に相応するもの...それは人間に備えられている「精神の力」です。「燃える」ということは元からあるものが変化、変質、変容することであり、そのものが持っている性質や形や力が、

を失うことでもありません。「物」によつては、気体となつて大気の中に溶けてなくなつてしまうこともあります。それが人の内にも起こるとき、人にとつてそれは大変な困難であり、苦痛であり、犠牲でもあります。人は他者のために自らの志に従い、自らを無にする事ができます。そしてそれによつてこそ、人は、精神の進化」を遂げる事ができるのです。また、その志と行為は、それに触れた人にさまざまに考えさせ、感じさせます。そして、また志を持つことを、行為することを促します。こうして人は共に「精神の進化」を遂げる事ができるのです。

教育の目的の一つは、子どもたちの前に世界を開示し、世界と人との繋がりを明らかにすることです。世界と人は多くのものを共有しているといふこと、そして世界に起きていることと人間の内に起きていることの中にも、共通するものが多くあるといふことを子どもたちは学び、それを体験する必要があります。

子どもたちは授業の中で多くを学び、体験します。がまた、行事や祝祭の中で学び、体験することも、子どもたちにとつて、とても大切なことです。わたしたちの学校では一年を通して、四季おりおりの行事や祝祭を行います。行事や祝祭に

学校行事における

「火」の学びと体験

子どもたちは授業の中で多くを学び、体験します。がまた、行事や祝祭の中で学び、体験することも、子どもたちにとつて、とても大切なことです。わたしたちの学校では一年を通して、四季おりおりの行事や祝祭を行います。行事や祝祭に



ひびきの村での作業風景

欠かせないもの、そして大きな役割を持つものが「火」の力です。今回は、「火」が主役を果たす行事の一つである、アドヴェント・ガーデン(待降節のはじまりに行う)をご紹介いたします。

子どもたちが天使を迎えられて部屋に入ります。部屋は暗く、真ん中にろうそくがぼつんと灯つているのが目に入ります。じつと目を凝らすと、床の上に置かれている樅の木の枝が渦巻き形に置かれ、細い道が作られているようです。ろうそくはその渦巻きの真ん中に置かれています。樅の木の香りと、蜜蝋ろうそくの甘い香りが部屋いっぱいになるが、暗闇の中で不安な心を抱えながら椅子に腰を下ろした子どもたちを、ほつとさせます。そのとき、なんとも心地良いライヤー(小さなたて琴のような楽器)の音が聞こえてきました。

天使が子どもたちに近づき、そつと囁きます。「さあ、あなたの番ですよ。いらしゃい」と。一人、またひとり...子どもたちは天使に手を引かれて渦巻きの道の入り口に立ちます。

そして芯をくり抜いた穴に蜜蝋ろうそくを挿したり、ろうそくにして、渦巻きの道を一人で歩いて行きます。

暗い道を、ろうそくの明かりだけを頼りに…天使にそっと背を押されて歩き始める子ども。心細げに母親を探す子ども。大きく息を吸い、意を決したように歩き始める子ども…暗闇の中をぐるぐると渦巻く道を、その先に灯っているろうそくの灯だけを頼りに歩きます。不安な心に打ち勝って、子どもはようつやくるつそくの火にたどり着きました。床にひざまずき、持っていたろうそくをその火を移します。ろうそくが赤々と燃えま



ひびきの村で行われるアドヴェント・ガーデン

す。その火を抱えて子どもは渦巻きの道を戻り、手にしたろうそくを道ばたに置いて来ます。後から来る人の足もとを照らすために…。

もう間もなく生まれてくる赤ん坊のために、マリアは太陽の光で作られた「金の糸」と、月の雫で作られた「銀の糸」で布を織り、産着を縫わなければなりません。その糸は森の奥にある機織り小屋に用意されています。マリアは機織り小屋へ行くために、この暗がりの渦巻きの道を歩いて行くのです。そうです、子どもたちは自分たちがようやく手に入れた灯を、後から来るマリアのために道ばたに置いて来るのです。マリアが道に迷わないように、無事に機織り小屋に着くように…。

暗い森の中を、勇気を出して歩いて行くこと。歩いて行ったその先には必ず約束された灯が待っていると信頼すること。そして、自分が苦労して手にした灯を、後から来る人のために捧げるということ…子どもたちは言葉で教えられないのではなく、命じられるのでは

なく、自分の経験を通して「勇気」と「信頼」と「奉仕」を学びます。「勇気」を持ち、「信頼」してやり遂げた成果を他者に「捧げる」…それが自分と他者の、そしてすべての人の幸せに繋がるということを学び、体験するのです。

「火」は子どもたちに実に大きな力を授けてくれます。

CEL

大村 祐子（おおむら・ゆうこ）

「ひびきの村」代表、シユタイナーいずみの学校、「自然と芸術と人智学のプログラム」、教員養成コース各教師。一九四五年北京生まれ。一九八七年よりサクラメント（カリフォルニア州都）のR・シユタイナー・カレッジ教員養成、ゲーテの科学芸術コースで学ぶ。九一年から日本人留学生のため、「自然と芸術コース」をカレッジで開始。九六年より北海道伊達市でR・シユタイナー思想を実践する共同体「ひびきの村」を始める。著書は、『昨日に聞けば明日が見える R・シユタイナーが洞察した「人生の七年周期説」』（ほんの木）など。